
魔王的な（後から決める）

糖分王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王的な（後から決める）

【Nコード】

N3542Z

【作者名】

糖分王

【あらすじ】

高校1年になる女の子っぽい名前の男「轟 刹那」（とどろきせつな）が美少女にあったり、魔王になったり、勇者と共戦したりなど 波乱万丈の 面白あり、ツッコミあり、バトルあり？のドタバタファンタジーコメディ（するつもり）

第1話 「プロローグ的な」

魔王。

その響きから、連想するのはきつと世界征服なんか考えちゃったり勇者が生意気だから、ダンジョンにモンスターを待機させて戦わせたり

魔界からモンスターの群れを連れてきて、人々を恐怖のどん底に陥れたりするといったおぞましい想像をするだろう。

だが、俺は違った。

いつも、勇者とそのユカイな仲間たちからボッコボコにリンチされ頼れる仲間が一人もいない一人ぼっちでとてもかわいそうな奴だと思っていた。

しかし、勘違いしないでいただきたい。

俺は別に、魔王が好きだというわけではない。

当然ながら、世界を救う勇者はメツチャかつこいと思うし何らかの力を使って、魔法をつかいモンスターを倒したいとか世界をまたにかけて、魔王と死闘を繰り広げたいとか思ったりもした。

まあ、俺がまだそういう類のものを信じていたころの話だ。

もうそんなことが、ありえないことを理解しつつも自重しつつもアニメやマンガやラノベでそのすこぶる少年心を抑えている今日この頃だ。

俺の名は、轟とどろき 刹那せつな。

毎晩、アニメやマンガやラノベをみて過ごしている

いわゆる普通の、少し名前が女の子っぽい（禁句である）ということを除けば

大体そこらへんに転がっているちよいオタな高校1年生だ。

高校1年生と言ったが、正確には高校1年生に「なる」ところだ。

・・・このように、「普通の人間だ」的なことをいうやつに限って大抵普通ではない。

ある日突然戦争に巻き込まれ巨大ロボに乗り、ビーム何たらを振り回して戦ったり

七つ集めたら願いが叶うボールを巡って、強敵とすさまじい格闘を繰り広げたり

手が伸びて、海賊王になったりなんかしない

俺は、正真正銘の「普通」の人間だ。

さつきから、著作権ガン無視だがそれだけ器の大きい人間だということにしておく。

そんな俺が、3月に我が愛しの中学（いい思い出なんか一つもない）を卒業し

4月から私立聖魔璃亞学園しりつせいまりあがくえんに入学することになった。

そして、明日が入学式 文字通り青春の1ページだ。

さあ、これからどんな青春が俺を待ってるんだ！？ワクワクすっぞ！！

と期待に胸を膨らましながら眠りについた。

第2話 「オカンと僕と時々銀髪美少女」

翌朝。

ただいまの時刻 AM8:40・・・

このままでは入学式初日に遅刻というマンガでは面白いが本人にとっては、まったく面白さのカケラもないバットハプニングが起こってしまう。

この寝坊の理由は、じつに明確だ。

昨夜、ワクワクしすぎてなかなか眠れず・・・

いわゆる、遠足や修学旅行というイベントの前に訪れる例のアレだ。俺は、ベットから跳ね起きパジャマを脱ぎ捨て、制服に着替え、階段を駆け下り

母に、もう日本語ですらない文句やら罵倒を浴びせてパンを1枚かぶりつき家を飛び出た。

4

母からもらった学園までの地図を見ながら自転車を猛烈にこいだ。この母が描いた地図は、やたらと蛍光ペンで色分けされており寝起きの目ではとてもキツイ。これでわかりやすくしたつもりだろうか？有難迷惑である。

そんないろんな意味で残念な地図を頼りに学園を探す。

ようやく地図の「ここ」（目的地であろう）とデカデカと書いてあるところに到着したが・・・
その時ようやく思いだした。

母は、重度の方向音痴だということを。なぜ、忘れていたのだろうか？

それは多分、強烈な眠気とバタバタしていたせいだろう。

目の前に建っているのは、最近 改装したばかりの小学校だった。

校門には、しりつせいまりあしょうがっこう私立聖真理阿小学校と書いてある。惜しい！！

「はあ」

ため息しか出てこない。

どうしたものか。これはもう完璧に大遅刻である。

こうなったら、もうこのままバツクれてやろうか。

いや待て、そんなことしたら俺の青春が終わる。

そうだ。事情を話してこの小学校の人に道を聞こう。

職員室へ行き、事情話した。なんというか、ほかの先生の視線が痛い。

教頭らしき人物が、やさしく教えてくれた。

以外にもこの小学校から学園は近いらしい。

職員室を出るとき軽く会釈をして先を急いだ。

大体、なぜ俺が学園の場所を知らないのかというと

これには並々ならぬ、涙ぐましい理由がある。

もともと高校なんて卒業さえできれば何でもいいと考えていた俺は

まあ、普通に友達と同じ高校を受験した。

特に、難しい試験はないのだが今年を受験者が多かつたらしく（少子化なのにな）

当然ながら頭の悪い俺は落ちた。

そして次に受験した高校では一応合格したが突然の放火事件により高校もろとも灰と化した。

3度目の正直ってことで猛勉強したが前日に流行りのインフルエンザにかかり受験さえできずに不合格。

もう世界に呪われているんじゃないだろうかと引きこもりがちになった俺に

母がこの私立聖魔璃亞学園しりつせいまりあがくえんの話をもちかけてきた。

つまり、母親のコネで高校に通えるのである。

まったく、母には頭が上がらない。（先ほど罵倒してきたばかりだが）

ていうか、アンタが場所知らないでどうすんだよ！
この行き場のない怒りをペダルをこぐ足にそそぎこんだ。

学園は、俺の家からなら自転車で10分くらいで着くのだが
寝坊と母の地図の見事なまでのコラボレーションにより20分くら
いかかった。

「やっと着いた」

今度こそ校門には、私立聖しりつせいまりあがくえん魔璃亞学園と高らかに書いてあった。

校門には、きれいな桃色の桜が散っていて、外見はどこか神秘的で
神々しく何よりデカイ。

学園というよりは教会に近い感じだ。

そして、大きな鐘が一番上のほうにある。

おゝゝゝ、なんかいい感じじゃねっ。

とか、歓喜に浸っていると自分が遅刻していることを思い出した。
急がねば。

駐輪場に自転車を止めて、体育館に向かった。

当然、入学式にでるためだ。(無駄だろうが)

アスファルトに自分の靴音だけが響く・・・

体育館に向かうのだが自分の足音以外何も聞こえない・・・

やっぱり、もう終わったんだろっな。

アスファルトを抜けて体育館へと続く渡り廊下を完全諦めムードで
気怠く重い足で歩いた・・・

しかしつ、俺は次の瞬間 目を見張った！

渡り廊下の最奥、体育館の入り口前に何やら人らしきものが横たわ
っていたのである！

俺は、いつの間にかその人らしきものの方へ走っていた。

近づいているうちに、気づいたが倒れている人はどうやら 女の子
のようだ。

もっと近づいてみると・・・っ!??

俺の眠気が一気に大気圏を突破し、月をも貫いてぶっ壊してしまう
と思うくらいにぶっ飛んだ。

危うく、サイヤ人が大猿になれなくなるところだった・・・じゃな
くて！

俺の目の前にいる女の子はものすんげえ可愛かった。

いわゆる、「美少女」だ。

雪のような白い肌

針金のように鋭く、ナイーブで透き通りそうな銀髪

気の強そうな眉毛と目

そして、一番俺の目についたツーサイドアップ（も、萌える）

・・・

はっ、どのくらい見とれていたんだろうか。

よく見たら、顔色が優れていない。

これは、いけない！！

早くこの子を保健室へ連れて行かなくては！！

しかし、どうやって？

担いでいくのか？

彼女いない歴15年の俺が？

女の子の目を5秒も見つめられないこの俺がか？

いや、無理無理無理無理！！

「うーん。」

ギクッ！

銀髪美少女がうなっている。

顔色が悪くなる一方だ。

・・・

ええい！！

男、刹那 目の前に倒れている女の子一人救えないで何が男だ！！

（今、女の子みたいな名前のくせにとか言った奴は誰だ！！）

俺は、その銀髪美少女を担いで保健室を探すことにした。

第3話 「リアル・・・怖い」

とても甘い香りがする・・・

それはまるで、バニラにココナッツの香りを混ぜた感じだ。

心なしか背中あたりに生暖かく柔らかい感触がある。

ああ〜ここは、天国だろうか・・・

俺の人生のなかでこんなに幸せを感じた瞬間があっただろうか？

もうこのまま、天授をまっとうしてしまおうか。

・・・はっ！

俺は、意識を取り戻した。

危ない危ない、もう少して本当に逝ってしまうところだった。

三途の川の向こうで、バツチャンやジツチャンが

コタツを囲んで、ミカンをむさぼっていたのが見えた気がしたが
気のせいだろう。

うん、気のせいだ。きっと俺の踊る心が見せた幻だ。

そして、現実に戻ってきてから蘇ってきた、この重量感。

明らかに、重力と俺の体重だけでなせる重さではない。

まあ、当然っちゃー当然だ。

なぜならば、背中に美少女を背負っているのだからである。

もちろん、この重さには体重もあるが精神的重みもある。

こんな美少女をこんなオタが背負っているという、罪悪感？

ちよつと待て、なんで罪悪感を感じにゃーならんのだ？

どちらかというと、優越感だろ。いや、そんなことはどうでもいい。
大事なのは、この子を無事に保健室まで送り届ける体力が俺にある
のかどうかだ。

さっきから言っているが、俺はオタだ。

リモコンより重いものを持つ生活をまず、していない。

よって、基礎筋力も基礎体力も皆無。

もちろん、小中学校での体育の成績は「オール1」

見たか！これが俺の人生の一番の称号だ！！（えっへん）

もう一度言うが、大事なことはただ一つ

この子を無事に保健室まで送り届ける体力が俺にあるのか否かだ。だから、早急に保健室をさがさなくてはならない。

しかし、ほんとにデカいなこの学園。

一階だけで伊達直人の心の広さくらいあるんじゃないだろうか。

今の例えでわかるとおりそれだけ広く感じるということだ。

幅2メートルはある廊下を歩き続けていると

生徒玄関口らしき場所を発見した。

そのすぐ隣の部屋の前に「保健室」と書かれてあった。

俺は、残りの全身の筋肉を励ましなんとかたどり着いた。

ドアノブには、「ただいま留守にしています」という掛札があった。

この「」に非常に腹がたつかが、幸いにも鍵はかかっていなかった。たので入ることにした。

保健室の中は、独特の消毒液の匂いがする。

ベッドがあつたので、女の子を寝かせた。

その隣に置いてある丸椅子に俺は、へたり込んだ。

非常に疲れた。

俺の背中には、まだ温かみが残っている。

ふと、女の子の方に目をやった。

やっぱ、かわいいな。自分でも気づかないうちにニヤツいていた。

自分に喝を入れる。

背負っていて思ったのだが、この子結構胸が大きい。

身長は、そんなに高くはないが

出るところは出ていて、引き締まるところはしっかり引き締まっている。

(セクハラだぞ、自重しろ。)
しかも、甘くていい香りがする。
俺の疲労しきった体が癒されていくようだ。
いつの間にか、またニヤツいていた。
何考えてんだ俺は！自重しろ腐れオタが！
自分で自分を罵倒するほど悲しいことはない。

保健室の中は、静寂しきっている。
どうしたものか。

このまま保健室にこの娘を置いていくわけにもいかない。
かといって、この娘が起きるのを待っていたらいつになるか分からないし

起きた時の説明が面倒だ。

「うーん」

しばらく、考え込んだ・・・

仕方ない、保健の先生を呼びに行くとするか・・・

椅子から立ち上がり、保健室のドアノブに手をやった。

その時っ！

「きゃ~~~~~」

俺の背中の方から悲鳴が聞こえた。

何事か！と振り向いたら視界が真っ暗だった。

どうやら枕を投げつけられたらしい。

枕が顔からずり落ち、視界が明るくなり悲鳴が聞こえた先を見ると

そこには、さっきの銀髪美少女が赤面してこっちをにらんでいる。

.....

しばらくの沈黙が続いた。

この沈黙を破ったのは、彼女の方だった。

「こ、こ、この、変態痴漢外道鬼畜キモい屑虫豚野郎オタメガネ」

~~~~~！！」

啞然。

一瞬俺の体のすべての器官と世界が停止した。  
な、なんですか？

変態？鬼畜？オタメガ？

ちよつと待て、確かに俺はオタだがメガネではない。・・・っでは  
なく！

こんな罵倒の嵐を受けた人間がこの世に存在しえるのだろうか？

あんな、美少女の口からこんな言葉が飛び出してしまうのか？

リアル、恐ろしい・・・

「あ、あの〜」

一歩近寄った。すると

「来〜る〜な〜」

あるうことか、その美少女は近くにあった、本やら花瓶やらを投げ  
つけてきやがった！

「痛いっ、痛いから！！」

とりあえず、顔面直撃だけは避けた。

「おっ、落ち着け〜！！」

俺が、また一歩近づくと

「来るな、オタメガ〜」

今度は上履きを投げてきた。

間一髪のところ片方の上履きの顔面への直撃を避けた俺だったが、

「ヴっ！」

俺は、前かがみで倒れこんだ。

何が起きたかというと、俺の男にしかない男だけのシンボル（下半  
身のある一点）に

もう片方の上履きがジャストヒット！！

目の前が、真っ暗になる。

「お、おれは、たしかにオタだが、め、メガネじゃねえ・・・」  
バタッ

なんていう捨て台詞だ。

ザロキヤラの「覚えてるよ」「の方がまだ2倍くらいマシである。

#### 第4話 「保健室の白衣魔女」

目を覚ました。

視界には、青い天井が広がり独特の消毒液の匂いが漂う。

ここは、どこ？ 私は、誰？

最後のは、嘘だ。

俺は、轟とんま 刹那せつな 世界を魔王から奪還すべく立ち上がった勇者だ。

アレ、違ったかな？

まあ、大体そんな感じか。

ガシャンッ

俺の心の中にいる天使が悪魔を縛り上げ、プリズンに放り込んだ音がした。

今のクダリは、ほぼねつ造だ。

俺は、何してたんだっけ？

.....

「バサッ」

俺は、状態を勢いよく起こした。

思い出した。すべて思い出した。からつきし思い出した。

確か俺は、倒れている女の子を発見し保健室まで背負ってきたはいが

見事に返り討ちに会い床に突っ伏していたのだった。

まったく、あの女はなんだっただんだ？

命の恩人に向かって、何たる無礼をしてくれやがったんだ。

.....?

そういえば、あの女はどこ行った？

あたりを見回す。

彼女の姿はどこにもなく、ただ花瓶やら本やらが散らかっていた。

「はあ〜」

思わずため息が出てしまう。

あの女、結構顔色がよくなかったが大丈夫だろうか。  
まあいつか、恩をあだで返す奴はほおっておくとする。  
それよりも床に散らかっているブツ共を片づけなくては。  
俺は、せつせと片づけ始めた。

「ふう〜」

片づけ終わった。

なんだか、すっきりした気分だ。

.....

何か忘れているような・・・  
っ！！

そうだ、今日は入学式初日俺は遅刻をしているのだった。  
ただの遅刻ではない。大遅刻だ。  
時間を確認する。

AM10:30。

まだ、ロングホームルーム LHRには間に合うはずだ。

俺は急いで保健室の扉を開き、走り出そうとした・・・  
その時っ！

「ドンッ」「バサッ」「イッタ〜いです〜」

かわいい声でした。

どうやら人にいぶつかってしまったみたいだ。

とりあえず、俺は目を開き謝ろうとした。

「すみません、急いでたも・・・ん・・・で？」

俺は目を疑った。

目の前に、白衣をまとった小学5年生くらいの女の子が倒れている。  
押し倒してしまっただけなのかなので俺は慌てて立ち上がった。

「だ、大丈夫？」

小学生に手を差し伸べる。

「ありがと〜、大丈夫です〜」



こっちに大丈夫スマイルを向けてきた。  
か、かわいいじゃねえか。言っておくが俺にそういう趣味はない。  
ただ、純粹にだ。

目はおつとりしていて、腰のあたりまで伸びたきれいな黒髪ロング  
が目には焼き付いた。

ていうか、なぜ小学生がここに？

「あつ、言っておきますけど私 小学生じゃありませんですよ」  
と小学女子。

何っ、心が読まれている！？

俺が困惑しているのを察したのであろう、白衣のポケットから何やら取り出して俺に見せてきた。

「ねっ」

そう言っで見せてきたのは運転免許証と教員免許証だった。

「桂木 美歩？（かつらぎ みほ）」

俺が尋ねるようにツイートした。

「そうっ」

そう言っニコリと笑った。

何々？ほんとだ。教師だ。年齢は・・・24歳！？

マジでか？リアルにこんなことがあり得るのか？

若作りにも限度があるぞ！

だから、本人に確認をとってみる。

「マジですか？」

「マジです」

即答された。

「じゃあ、その白衣って」

「そう。保健の先生ですよ」

なるほど、真実はいつも一つなんだな。

「きみ、見ない顔だけど新入生？」

と問われたので

「は、はい。今日からお世話になる。轟 刹那です。」

と混乱気味の頭を整理しながら答えた。

「女の子みたいな名前だね」

「ほっとけ!」

「あははっ、やっぱり名前のこと言つと怒るんだね。愛由あゆが言つてた通りだ。」

愛由?どこか聞き覚えのある名前だ。

「まさか、愛由あゆって俺の母のことですか?」

「そだよ」

これまた即答。

轟とどろ愛由あゆ、俺の実の母親の名前だ。

ていうか、なんで母の名前が出てくるんだ?

「それはね、君のお母さんと私と学園長が親しい知り合いだからだよ」

つまり、母が学園長に俺の入学手続きを頼みこんでしてもらったと  
いうことだろう。

つーか、何で心が読まれてるんだ?

魔法使いか何かだろうか?

「まあ、そんなところかしら。」

.....

何かをあきらめた。

「ていうか、きみ、こんなところで何してるの?」

.....はっ!

そうだ!早く教室を探さないと!

だけど、どこにあるのか見当もつかん。

俺は美歩みほ先生に、事情を話して教えてもらうことにした。  
話し終えると同時に先生は噴出した。

「あはははははっ、君最高だよ。世界に呪われてるんじゃない?」

まったく同感だ。

「うん、事情は分かった。よし、ここは先生が一肌脱いで案内

してあげよう。本当に脱ぐわけじゃないよ？」

「わかってますよ！！」

まったく、この人が言うとしゃレにならない。(いろんな意味で)

そして、俺は美歩先生をパーティーに加えると保健室を後にした。

(なんちゃって)

## 第5話 「アグレッシブと、うっとうしいは紙一重」

ここ、しりつせいまりあぐえん私立聖魔璃亞学園（略して魔璃学）は5階建てらしく

一階には保健室やカウンセリング室や職員室などがあり

二、三、四階には下から三年生、二年生、一年生といったふうに学年分けされており

クラスは、1（ファースト）から4（フォース）までである。

五階には、校長室と各特別室がある。

ということを俺の隣をテチテチと歩くCKT（チビツ子ティーチャ―）から聞かされた。

保健室を出て、左の方へ行くと二階へ上がる階段があった。

しかし、先生は階段ではなくその横にあるエレベーターに俺を乗せた。

学校のエレベーターに乗るなんて、小学校にある給食を運ぶ専用のエレベーターに

入っていたらそのまま閉じ込められ運ばれて以来だ。

さすがは、魔璃学。だてにデカいだけじゃない。

そんなことを考えながら、ふと今何階にいるか確認する。

階数表示の数字が「4」のところへ移る。がそのまま通り過ぎ「5」のところまで止まった。

どういうことだ？一年生の教室は、四階のはずだが・・・

エレベーターの扉が開く。

「こっち、こっち」

先生が手招きする。

「あ、あの〜」

俺が口を開こうとしたその時、先生はデカイ扉の前で立ち止まった。扉の幅、3メートルはあるだろう。

な、なんだこのデカイ扉は？開けたら、魔王なんか待ち伏せてる

んじゃないだろうな。

「ここが、学園長室だよ〜」  
と美歩<sup>みほ</sup>先生。

「なんで、学園長室？」

俺は、疑問をそのまま口にした。

「だって〜、まだアイサツしてないでしょ〜？」

なるほどな。確かに遅刻したし、入学式には出てないし・・・

挨拶よりも謝った方がよさそうだ。

先生は、コンコンツ とノックすると

「うんしょっ、うんしょつと。ん〜」

一生懸命ドアを押している。

なんとも可愛らしい光景だろうか。

まあ、確かにこの幼い体じゃこんなバカデカイ扉なんて開けられないだろう。

「俺が開けますよ。」

俺にも開けられるか分からないが、開けてみることにする。

ドアノブに手をやり、力を込める。

・・・

ダメだ。開かねっ。

そして、先生にバトンタッチ。

黙々と、押し続けている先生。

俺は、あることに気づいた。なんで気づかなかったんだろう。正直、  
恥ずい。

「先生、あの〜、もしかして、それって引き戸じゃないんですか？」  
・・・  
気まずい沈黙・・・

「にはははっ、そんなこと君に言われるゼロコンマー一秒前にきづいて  
いたさ〜」

そんなことをいう先生の顔が真っ赤であることにはツッコまないで  
おいてやる。

ガチャツ 扉が開く。案外、扉は軽いようだ。  
学園長室の中は、扉のわりには小さく右サイドには本がギッシリ詰  
まった本棚。

左サイドには何か見たことがあるようなくないような絵画が飾られ  
部屋の中央最奥に学園長の豪華そうな作業机と後ろ向きの椅子が置  
いてあり

後ろの窓から日が差している。

「よく来たな。」

椅子の方から低い声がした。

ゴクリツ。

マジでか。マジで魔王が待ち伏せていたというのか？

「コー」「パー」

何やら聞き覚えのある鼻息をしている。

そして次の瞬間、椅子をくるりと回し振り返った！

.....

ツッコミどころがありすぎる。

まず、黒ずくめの衣装に黒いマスク.....

次に不気味な呼吸音.....

最後に右手に握ったFXライトセイバー.....

「どこの映画のスターでウォーズなシスの暗黒卿だよ!!」  
思わず思いつきりツッコんでしまった。

.....

またしても気まずい沈黙.....

「ぶぶぶつ、」

ん？

「ぶぶぶつ、ぶはははははあ〜」

えっ？

シスの暗黒卿が急に笑い出した。

「いや〜、ナイスツッコミだよ！少年！」

なぜか暗黒卿に親指を突き立てられた。

「悪い悪い、ちよつとカラかつてみただけだよ。合格だ。」  
合格？もうわけがわからん。

めちゃくちやにトレースしている俺の脳を落ち着かせる間にベ  
ダがマスクを脱いだ。

「ようこそ、我が私立聖魔璃亞学園へ。待っていたよ、轟とどろき 刹那せつな  
やん。」

マスクから出てきたのは、銀髪の美人だった。正確に言うと大人の  
魅力というか

キャリアーウーマンげな感じだ。（もちろん、俺が救ったであろう  
美少女ではない）

「ふちゃん」ではありません。ふくんですよ。駄ースベイ駄ー学  
園長」

俺は、ワザと嫌味っぽく言った。

「いやだな。そんなに怒らないでよ。冗談だつてば、轟少年！」  
ニヤリとした笑顔と突き立てた親指がこっちを向いている。

「ちなみに、私の名前は 星沢ほしざわ 椿つばなこの学園の学園長よ。ツッキー  
でいいわよ。」

なんとというアグレッシブな人だ。

「じゃあ、ツッキー学園長この度は入学させていただいて ありが  
とうございました。」

一応、お礼をした。できる息子だからな。

「いえいえ、わざわざ無理言って入学してくれてこちらこそありが  
とう。」

へっ？

「あの、母が無理言ったんじゃ。」

「何言っているの？こつちが無理言っただよ。」  
どういうことだ？

「なんで俺 なんかを？」

「・・・何も聞いていないのね・・・」

なにやら、意味深な言い方だな。

.....

少しの沈黙の後

「まっ、それは おいおい話すわ。」  
とあいまいにされた。

「あつ、それから少年く入学初日から遅刻とは感心しないな」

「す、すみません。これには深い理由が・・・」

俺は、若干年齢詐称ぎみな保健の先生に話した通り伝えた。  
すると、またもや噴出しやがった。

「ぶはははははっ、少年は根っからの魔王体質のようだね」  
魔王体質？なんだそれは？

「魔王体質ってなんですか？」

「まあ、それもおいおい話すよ。」  
またかよ。

「それはそうと、もう会ってるなら話が早いや。じゃあ、付いてきて。」

そういって学園長室のドアへと向かう、ツッキー。

「あのく、どこに行くんですか？」

俺は、尋ねた。すると

「少年のクラスだよ」

そう言っつて、ウインクされた。

俺のクラスか。友達できるだろうか？

不安を胸に抱きながらも

新たにツッキーをパーティーに加えて学園長室を後にした。



第6話 「それでも僕は、やってない(マジで)」

学園長室を出て右に少し行くと、さっき上ってきたエレベーターがある。

そちらのほうへ足を向ける。

「どこに行くの？」

とツツキー、もとい学園長。

「えっ、一年生の教室は三階じゃないんですか？」

と勇者、もとい俺。

「うん、そうだけど少年はこっち」

そう言っつて、手招きする。

学園長室を出てから左の方へ歩き出した。

少し歩くと、各特別室が見えてきた。

「サイバールーム」「サモンルーム」「ビジョンルーム」

どんな部屋なのかよくわからないネーミングをしている。

そういえば、この学園はどんなことに力を入れている学校なのだろうか。

母からは、「世界が365度、変わるところ」としか聞いていない。

(実質5度)

「あの、この特別室って何をするんですか？」

疑問をそのままぶつける。

「まあ、焦るな少年。クラスにいたら話すよ。」

さっきからなんなんだ？もったいぶって。

そうこうしているうちに

「着いたよ。」

と言われたので顔を上げる。

五階の最奥、扉があった。

窓から光が差し込んでいるせいか神々しく光っているように見える。

その扉の真ん中には「？」という文字が描かれている。

「ここが、少年のクラス・クラス？（ゼロ）よ。」

クラス？？確かクラスは1（ファースト）から4（フォース）までじゃなかったのか？

もう、俺のサーバー（脳）じゃ整理しきれない。

「さあ、その扉を開いて 新世界の神になりたまえ！」

と駄ースベイ駄ー、もとい学園長。

「よし、ラピユタ王に俺はなる！・・・って、なんでやねーん！  
思わずノリツッコミをしてしまった。

「いいぞ、少年！そしてそのままラピユタとともにゴミのように海へ落ちて行きたまえ。」

それは、褒めているのか？それともけなしているのか？

「というのは冗談として、早くお開けなさい。きっとみんな歓迎してくれるわ。」

.....

本当に歓迎してくれるだろうか？

正直、俺の学校デビューにはいい思い出がない。

中学に入学するとき俺はこの町に引越してきた。

小学生の時は体が弱く、学校にはほとんど来ていなかった俺は当然友達などおらずそのまま卒業。

小学校を卒業する頃には俺の体は正常になり、無事中学へ入学。

しかし、入学式の日、朝起きると目ざまし時計が1時間遅れており、すでに遅刻。

慌てて自転車をこぎ始めるとチェーンが外れ、拳句の果てにはタイヤがパンク。

自転車を乗り捨て急いだが着いた頃には、入学式は終わっており教室で自己紹介が行われていた。

誰かの自己紹介の最中にドアを勢いよく開けてしまい、気まずい空気の席に着いた。

自己紹介ではスーパ―に噛みまくり、髪は寝癖でボサボサ、制服は乱れ  
チエーンを触っていたので体中サビの匂いがして、その日 一日中  
サビ臭を振りまいた。

しかも、担任は生活指導の先生らしく入学初日から服装を指導され  
目をつけられた。

それからの学校生活は、もう酷いというか呪われていた。

体育祭では骨折し、修学旅行では前日にオタフクかぜ などなど e  
tc。

そんな涙ぐましいスクールライフでも、耐えている俺に神様は少し  
だけ友達をくれた。(類は友を呼ぶ)

少しでも友達がいるだけでどれほど自分の世界が彩いろどられるかを知っ  
た。

そう、今になって思えば俺は運が悪い。

しかもただの運の悪さではない。魔王級だ。

さつき、学園長が言っていた「魔王体質」とはこのことだろう。(  
たぶん)

.....

急に不安になってきた...

よし、開けるか。

俺は、ドアノブに手をやる。深呼吸を一回。

期待やら不安やらを抱え、ノックをし ドアをゆっくり開いた。

.....

俺はその日の光景を一生忘れないだろう。

ていうか、忘れられないだろう。

期待を胸に開けたはずのドアが

まるでパンドラの箱を開けたのではないだろうかと錯覚してしま  
そうになった。

教室の中は普通の高校より豪華で

部屋の真ん中には新品のようにきれいな木製の机が6つあり

椅子には肘置きがあり、15度くらい傾けられそんな背もたれがあ  
る。

黒板はホワイトボードで、照明はシャンデリア・

そんなことはいいとして、俺が最も気がかりなのは

真ん中の椅子に座っている5人がこつちを向いているが顔が見えな  
いということ。

正確に言う顔に見覚えのある覆面マスクをしている。

みんなスカートを履いているので、かろうじて女の子であると分か  
った。

白い布の上には、見覚えのあるマークがある。

手の甲をこちらに向け人差し指で天を指さしており、手の甲には目  
が描かれている。

そしてその手の甲の背景には、それまた大きな目が描かれていた。

.....

頭が痛くなってきた。

友達が欲しいとは思っていたが、まさか「ともだち」が来るとは思  
わなかった。

俺は「よげんの書」を書いた覚えはないのだがな。

何だこの学園は？マスクネタが流行っているのか？

.....

どうしよう・・・ツッコむべきだろうか？

ツッコんだら負けな気がする。

だが、ツッコまなければこのまま世界にウイルスをまき散らして  
世界を滅亡させるかもしれないのでツッコむことにしよう。

「どこの20世紀げな少年のともだちだよー」

若干、棒読みげにツッコんだ。

「バシッ」「痛っ」

学園長からチヨップを食らった。

「そんなツッコミじゃ、蚊も殺せないぞ！」

と学園長。

「ツッコミ程度で蚊が殺せたら、すでにこの国の蚊は全滅してますよ！」

まあ、お笑いブームだからな。

「それだ！ナイスツッコミ！　そういうツッコミが欲しくてわざわざこのマスク作って被ってもらったのに、このままじゃ作り損だったよ。」

「やっぱ、アンタが仕組んでいたのかよ！」

俺は頭を抱える。ダメだこの人。

「そんなことはいいとして、みんなもう脱いでいいわよ」

脱ぐとは、もちろんマスクのことだ。

1人の女の子がさっそくマスクを脱いだ。

「もー、お母さんなんでこんなマスク被らせたわけ？息がしずらくてたまらなかつたわよ」

・・・っ！

俺は目を見開いた。

マスクを脱いだ女の子には見覚えがあった。

というかさっき見たばかりだ。

雪のような白い肌

針金のように鋭く、ナイーブで透き通りそうな銀髪

気の強そうな眉毛と目

そして、ツーサイドアップ。

・・・そう。

保健室で俺の大事なシンボルに上履きを投げつけてきた銀髪美少女だ。

「あつ。」

目があった。

「な、な、なんで変態オタメガがここに？」

彼女は目を見開いて、つぶやいた。

「そりゃあ、こっちのセリフだ。後、俺は変態でもないしメガネでもない。」

さっきは、捨て台詞で言っただけだったのでハッキリ言ってやった。

「はあ？何言ってるの？保健室で私を襲おうとしていたじゃない。

それを変態と言わずして何ていうの？」

な、なんだと！？

「ま、まさか、少年がそんなことをする人間だったとは！？」

学園長がワザとらしいリアクションをとりやがった。

「アンタには、さっき話したじゃないですか！てか、誤解を招くい方してんじゃないよ！体育館前で倒れていたお前を誰が保健室まで運んでやったと思ってるんだ！？」

俺は少し荒々しい口調で言った。

「だから、保健室に運んで私を襲おうとしてたじゃない。保健室の鍵を閉めようとしてたし。」

と彼女の主張。

俺は、あの時のことを思い返した。

確か俺は、保健の先生を呼びに行こうと扉に手をやったところで彼女に返り討ちにあった。

・・・っ！そうか！

彼女の寝ていたベットからの角度だとちょうど鍵を掛けているように見えたのか。

「違う！俺は保健の先生を呼びに行こうとしていただけだ。」

「どうかしら、言い訳にしか聞こえないわ」

こ、このアマ！・・・どうも信じてくれそうもない。

ああ・・・真実は何て無力なんだ。

俺がどう説得するか考えていると学園長が

「まあ、落ち着きなさい 亜美<sup>あみ</sup>。少年はそんなことする子じゃないわ。なんてったってまだ女の子の手も握ったこともないチキン野郎なんだから。そんな子が女の子を襲えるはずがないでしょ？」

「・・・それもそうね。女の子の手も握ったこともないヘタレが襲えるはずないか。」

グサツ。2度も、2度も言いやがったよ！母親にも言われたことないのに！！

俺のハートがズタズタにされた。もうHPが赤くなっているだろう。「そうだよ、そうですよ。俺は未だに女の子の手も握ったことのないヘタレでチキン野郎ですよ！ごめんなさいね！！」

履き捨ててやった。

てか、なんでそんなことわかるんだ？

「それは、君がそんな感じのオーラをかもし出しているからだよ」

とかわいい美歩先生。

また心を読みやがったな。

・・・

「その、い、一応感謝しといてあげるわ。それと勘違いしちゃってたみたいでごめんなさい。」

素直に感謝されると少し照れてしまう。

「い、いや、分かってくれたならそれでいいよ。こっちこそいろいろおいしい思いさせてもらったし。」

「おいしい思いつて何よ。」

「いや、妄言だ。気にするな。」

彼女はジト目でこっちを見てくるのでとりあえず目をそらして知らんぷりをした。

なんとか彼女の誤解も解けたようで、まあ良しとする。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3542z/>

---

魔王的な（後から決める）

2011年12月18日03時04分発行